

豊饒の土地 ——週末ごとの畑作



札幌市医師会
札幌第一病院

あらし
嵐

まさ ゆき
方 之

この数年間、春から秋にかけて病院業務の傍らに畑作をつづけている。札幌市医師会会員の私が道北地方の話をするには違和感もあるが、年男になるので原稿を、とのことで、他に思い当たる話題もないのでやむなく筆をとった。

明治年間に曾祖父が屯田兵の一員として道北の現在の土地に入植した。以来130年以上その土地を代々手放さずに（手放せず）に所有している。農地のうち畑の部分（面積不明）を最近耕作させていただいている。実際には時間的にも体力的にも余裕はなく、その面積の半分弱をようやく耕している。畑作の再開は亡き妻のアイデアであった。私には畑作といっても農業の技術的な基礎知識も経験もなく、家庭菜園の知識すらほぼ皆無に近い状態であった。妻も天の川を見たことがなく、四葉のクローバを初めて見つけて喜ぶような街中の育ちであった。妻が雑誌とTV番組で得た知識に頼って畑作を始めた。

今更ながらの道楽といえば、文字通り道楽であるが、ほかの考えもあって続けている。準備として、ほぼ放置してあった私の実家の一階を整備し、宿泊もできるようにした。家庭用の耕運機を購入し、さらに他の農機具や種・苗をホームセンターで入手した。納屋などは以前の台風で屋根が破損したため、修繕する意欲もなく、取り壊して更地にしてあった。そのために小さな物置も購入しなければならないようになった。休日に早起きして札幌から高速道路で片道2時間をかけて訪れ、家族で畑仕事や敷地のメンテナンスをするわけである。むろん採算は度外視である。

元々が北海道開拓の比較的初期に選ばれ、農業の成功が期待された地域であった。近隣の皆様も開拓時からそのまま残っている家系の方が珍しくない。土地の力が強いのか作物はじゃが芋、とうきび、茄子、山芋などの栽培は成功したといえる。わずかの肥料は用いるが、農薬は全く用いていない。実のところ農薬を扱う知識もない。ただし、とうきびは

野生の動物に一部食べられたために、急いで防獣ネットなるものを購入して設置した。トマト、キウリ、ズッキーニなどは1～2週に1回の農作業では大きく育ちすぎて収穫に間に合わない。

畑作だけではなく、家の周囲（宅地）の庭には桜、サクランボ、ブルーベリー、梅、栗、柿（育つとは思えないが）の木を植えた。かつての庭であった場所は庭木が生い茂って林のようになっていた。狐の巣になってはとの危惧もあり7年前に全ての木を伐採していた。そのあとは大きな庭石が転がっており、雑草、雑木が生い茂っている。開拓前の植生に戻っているかの如くである。ただし、以前植えてあったと思われるダリア、ツツジ、バラ、ハマナスなどは雑草刈りをしたためか再び勢いを盛り返してきた。余談であるが、野生の動物の分布は変化し、近頃はアライグマが繁殖しているとのことである。白鳥や青鷺も飛来してくる。最近では準らしき鳥も見た。

肉体的には若い訳ではなく腰椎疾患もあって農作業は苦痛である。とくに前かがみの姿勢はつらい。体力的にはいつまで続けられるのかは疑問である。しかし、作物が育つ姿を見ることは喜びである。来年は何を植えようかとワクワクする。

何よりも、故郷の田園の風景には心を癒やされる。この風景にTVなどで「緑が豊かで美しい、自然がいっぱい」と紹介されるが、これは誤解である。実のところは隅々まで人々の勤勉な手が入った自然との戦いの成果としての姿であることを知っていたきたい。さらに、大雪山連峰の美しさは特筆すべきである。ごく最近、ロックバンドの安全地帯の旭川時代を扱ったNHKのドキュメントが放送された。彼らの練習した旭川市永山のスタジオから見える大雪山の雄大さが彼らに影響を与えたとの表現があったが、この風景は私の実家から見た大雪山とほぼ同じである。ところが、同じく最近であるが、NHKでドリカム・吉田美和さんの故郷、十勝の池田町での凱旋ライブを扱った番組があった。その中で故郷から見た大雪山の夕焼けを愛でる彼女の発言を耳にした。そうか、大雪山は反対の方向からからも見られるのか……と当たり前といえば当たり前であるが、北海道の広さを実感した。

このような贅沢をさせてもらっていることに感謝しつつ、毎年畑作に着手する雪解けを待っている。何のことはないこの文章はふるさと自慢にすぎないが、そのような喜びもあることを皆様にお知らせしたくて筆を取った次第である。

